

## 第9回 和歌山県弥生・古墳時代研究会の報告

開催日時：平成25年1月19日（土）13:30～16:00

開催場所：和歌山県立紀伊風土記の丘（和歌山市岩橋1411番地）

研究会の発表内容：

### 「大日山35号墳出土の動物埴輪の検討」仲原知之（紀伊風土記の丘）

現在大日山35号墳の埴輪の整理作業を進行中で、今年度末に報告書を刊行予定です。今回は人物埴輪を検討し、今回は動物埴輪を検討していきたいと思います。次回は家形埴輪、その次は器財埴輪を検討したいと思います。

大日山35号墳の動物埴輪は、東造出から横座り用短冊形水平板を付けた馬形埴輪1体、牛形埴輪1体、猪形埴輪1体、犬形埴輪1体、水鳥形埴輪3体、翼を広げた鳥形埴輪3体以上が出土しています。西造出から馬形埴輪2体、翼を広げた鳥形埴輪1体以上が出土しています。

東西の造出で共通することは、馬形埴輪と翼を広げた鳥形埴輪が出土していることです。相違点は、牛、猪、犬、水鳥が現時点で西造出から出土していないことです。狩猟の情景は東造出のみであった可能性もあります。なお、鶏は出土していません。

大日山35号墳の動物埴輪の概要は以上のとおりで、あとはみなさんに観察していただいて、観察した結果からわかったこと、気づいたことなど、各埴輪について詳しく検討していきたいと思います。

参加者：（敬称略）＜発表者1名＋17名 計18名＞

＜発表者＞仲原知之（紀伊風土記の丘）

＜参加者＞水田義一（紀伊風土記の丘館長）、萩野谷正宏（紀伊風土記の丘）、河内一浩（羽曳野市教委）、西田親史（伊丹市博・國學院大学院）、辻川哲朗（滋賀県文化財保護協会）、丸山真史（奈良文化財研究所）、今西康宏（高槻市教委）

（以下風土記の丘ボランティア）津田明子、金森昌子、岡本美代子、井ノ口清史、川本幸男、木村 健、芝 貴子、鳥居千純、掛井園子、島 弘毅

## 【参加者のコメント・質疑応答】

### <大日山 35 号墳出土の動物埴輪の検討>

#### ◎水鳥形埴輪

仲原 : 東造出から3羽出土しています。うち1つは頭部のみですが、3羽とも同じ大きさ、同じ形態をしています。足の表現はありません。首が長いこととくちばしが細長く丸いことからツルではないかといわれています。西日本ではほとんど出土していないと思うのですが。

辻川 : 西日本では出土していないと思います。

仲原 : ツルの可能性を考えているのですが、そのあたりの見解をうかがいたいと思います。

丸山 : 胴部が水平になっているので水に浮かんでいる姿に近く、カモ、白鳥の形態に近いと思ったのですが、くちばしを見るとツルやサギの仲間がいいと思います。ただツルやサギなどは姿勢が立っている姿になっていてもいいはずですが、そのあたりが少し気になります。あと、考古学的にはツルやサギと考えられることが多いと思いますが、同じようなくちばしで、コウノトリやシギ、チドリなどもいるので候補にはなると思います。ツルよりは身近に水田などにいる鳥です。

#### ◎猪形埴輪

仲原 : 背中にたてがみがはがれた痕跡があるので、猪あるいは馬と考えられる個体です。馬なら裸馬ですが、全体的な形態から猪の可能性が高いと考えています。牙の表現にもみえる粘土が口のところに確認できますが、牙と考えてもいいでしょうか。

河内 : 牙の可能性もありますが、表現がはっきりしないので断定はできません。

仲原 : あと、頭部の頬の部分を板状の粘土を貼り付けて作っているのですが、これは馬形埴輪の製作方法と同じで、馬形埴輪との共通点になります。犬形埴輪は板状の粘土を使わずに丸く作っています。

河内 : 猪でこういう作り方のものは見たことがない気がします。

今西 : 今城塚古墳では猪はいないのですが、昼神車塚の猪形埴輪は、同じように板状の粘土を貼り付けています。この猪形埴輪は、墳丘の外側を向いた面にだけ牙の線刻をしています。

#### ◎牛形埴輪

仲原 : 大日山 35 号墳では牛形埴輪を1体復元できました。全国でも10数例しかない珍しいものです。目、耳の他に1対の穴があり、これは角の部分と考えられるため、牛あるいは鹿が該当します。ただ鹿はもう少し首が長い形態としているので、全体的な形態から牛と判断できます。なお、角、耳、尻尾は差し込み式になっています。脚部は接合してい

ませんが、牛あるいは猪の可能性のある脚部が出土しています。牛と猪は大きさや胎土、焼成などが似ているため、現時点ではどちらの個体に伴うものか判断できていません。全体の形態は太い首や少し盛り上がった背中など牛の特徴をよく捉えたものとなっています。片側の胴体の下半部に何か粘土の板のようなものを貼り付けた痕跡が認められます。見られる面を意識したものかもしれません。羽子田古墳（奈良県田原本町）や音乗谷古墳（京都府木津川市）例のようなあごの下から首にかけての皮のたるみ（のど袋）の表現はみられません。

今西 : 今城塚古墳の牛形埴輪ものど袋は表現されていません。あと、今城塚も角は差し込み式です。鼻には何故か穴が4つあけられています。

河内 : のど袋の可能性のある破片がありますが、その牛形埴輪に接合しないのですか。

仲原 : この牛には接合しません。ただ、耳の穴の部分と思われる別の個体があって、もう1つ穴があいている可能性があるのです。耳と角の穴だとしたらもう1体の牛がいる可能性があります。

仲原 : 牛あるいは猪の脚端部は帯状の粘土を貼り付けた形態ですが、今城塚の牛はどのような形態ですか。

今西 : 何も貼り付けずにまっすぐになっています。

仲原 : 差し込み式の角があるのですが、差し込み式のため角の向きが確定していません。一番おさまりがいい所にすると、少し外側に向いてしまうのですが、今城塚の牛の角は前方方向に向いていますよね。

今西 : 今城塚の牛の角は前方に向いています。

丸山 : 牛の角は少し外側に出てから前方に向かうように伸びるので、この向きで問題ないと思います。

#### ◎犬形埴輪

仲原 : 背中部分が接合・復元できていないので、犬あるいは猪の可能性のある個体です。ただ首が少し立っていることや全体的に細身であることから犬と考えています。口には牙の表現があります。頭部から前脚部が接合しており、接合しませんが、脚部がもう1本あります。胎土・焼成が牛・猪とは違って明褐色で焼成も良好なので、犬と同一個体と思います。脚端部は猪あるいは牛の脚部と同じく帯状の粘土を貼り付けています。犬の耳は、牛や猪と違って、馬と同じく差し込み式ではありません。

辻川 : 脚部の内側をみると、縦方向に接合したような痕跡が認められ、関東地方の人たちが言っている「切開再接合技法」かもしれません。

仲原 : 牛あるいは猪の脚部にも縦方向に接合したような痕跡が見られます。切開再接合とはどのような技法ですか。

辻川 : 粘土紐を積み上げて脚部を作ったあとに、縦方向に切断して粘土の一部を取り除いて再び接合して脚部を細くする技法のようです。なぜそのような方法をとるのかよくわかりません。普通に粘土紐を細く積み上げることも可能なように思いますが。

### ◎馬形埴輪

仲原 : 馬形埴輪は東造出で1体、西造出で2体出土しています。西造出の2体は原位置がわかっている個体です。3体とも大きさ、形態、胎土がよく似ていますが、細部が若干異なっています。

津田 : 細部が異なっているとはどういうことでしょうか。作っている人が違うということでしょうか。

仲原 : 全体的には非常によく似ているので、同じ製作集団によるものだと思いますが、鐙の表現や帯などに使用している文様や工具などが異なっている部分があります。別々の人が製作した可能性が高いと思います。

仲原 : 鐙部分ですが、東造出の馬は横座り用の短冊形水平板を取り付けています。西造出の方は、1つが輪鐙を線刻で表現しています。もう1体は線刻ではなくて、何かはがれた痕跡が残っています。

辻川 : 前回、馬鐙ではないかという破片がありましたが、この馬の壺鐙になるのではないかと思います。少し大きさが小さいようですが、剥離した痕跡が輪鐙のようになっておらず、少し前側に寄っていることなども根拠となります。見たところ、剥離痕跡の形状がこの破片の形状に似ていると思います。

仲原 : きちっと接合する感じではありませんが、確かに剥離の形状は同じような形をしています。2個1対の方形刺突文での施文は該当箇所周辺の文様と同じで、焼成などもよく似ているので、この部分でいけそうな気がします。前は、これが馬鐙なら、西造出の2体とは違う形態の馬鐙なので、もう1体を考えなければいけないと言っていたのですが、これが壺鐙ならもう1体を考える必要がなくなります。

仲原 : 馬形埴輪の脚端部は、牛、猪、犬と違って、お椀を伏せたような裾広がり形態をしています。今城塚古墳ではどのような形態をしていますか。

今西 : 大日山35号墳の犬のように帯状の粘土を貼り付けた形態をしています。

仲原 : 井辺八幡山古墳では鏡板が複数の種類出ていますよね。

辻川 : 3種類ほど出土しています。馬ごとに使い分けていた可能性があります。その人の持っている馬を表現したとも考えられます。

仲原 : 大日山35号墳では鏡板が出土していないのが残念ですが、鐙部分が水平板と輪鐙、壺鐙の3種類あって、3体とも違うということは、井辺八幡山古墳と同じように馬ごとに使い分けていた可能性が考えられる

と思います。

西田 : 馬形埴輪が立っていた場所ですが、造出の中ですか、あるいは井辺八幡山古墳のように造出の円筒埴輪より墳丘側ですか。また向きはどちらを向いていましたか。

仲原 : 西造出については、造出の方形区画の中です。方形区画の中でも墳丘寄りです。東造出については、造出斜面部に転落した状況で出土しているので、どこに立っていたか不明です。ただ、遠くから転落しないと考えられることから造出の方形区画内にあった可能性が高いと思います。西造出の馬は北側、後円部の方を向いています。

### ◎翼を広げた鳥形埴輪

仲原 : 東造出で2羽復元できました。ただ焼成や胎土が少し違っています。2羽とも下部の円筒部が接合し、ほぼ同じ高さであったことがわかりました。鳥の種類として鷹ではないかとする見解もありますが、木製の埴輪に翼を広げた鳥がいますので、木の埴輪を土で作ったとも考えられます。円筒部がかなり高いので、木の埴輪のように棒にさした状態を表現している可能性もあります。この他に、東造出ではこの2体とは別個体の翼の破片、西造出では胴部の可能性がある個体が出土しています。これについて、翼を広げた鳥でいいと思いますか。

河内 : そう考えていいと思います。

辻川 : あと、不明埴輪としている突帯の上部がふくらむ形態のものも、少し胴部が長くなりますが、翼を広げた鳥形埴輪の胴部の可能性が高いと思います。

仲原 : そうすると、東造出では2羽以外にもう1羽いることになります。翼の破片の中に胎土が違って見えるものが含まれますので、全部で3羽もしくは4羽あった可能性があります。西造出でも1羽は確実にいることになります。これまで西造出では確実なのは馬形埴輪だけでしたので、翼を広げた鳥形埴輪を追加することになります。

仲原 : 東造出の2羽は、翼の作り方も若干違っていて、両方とも翼の下に粘土を2本補強として貼り付けていますが、一方には翼の下だけではなく、翼の上にも補強用の粘土が貼り付けられています。翼の上の粘土は何らの鳥の形態を表現したものとは考えられないですね。

丸山 : 翼は羽毛で覆われているため、形態の表現ではないと思います。補強でいいと思います。

仲原 : 翼を広げた鳥形埴輪には小孔が多数あけられています。これは他の動物には見られない特徴です。大日山35号墳では、家形埴輪に小孔が多数あけられていて共通性があります。小孔を多くあけることを好むという大日山35号墳の特徴が、動物埴輪ではこの翼を広げた鳥形埴輪に

だけ現れているということになります。

木村 : 水抜きのような機能があったのか、それとも模様のひとつなのでしょうか。

仲原 : 貫通していないものもあり、水抜きではありません。家形埴輪もそうですが、いずれも小孔も斜め上方向にあけられているので、何か棒のようなものを刺していた可能性もあります。動物埴輪のなかでこれにだけ小孔があるということは、この埴輪の性格を考えるうえでひとつヒントになるかもしれません。木製の鳥形埴輪には小孔があいているものはありますか。

辻川 : 小孔があるものはないと思います。

河内 : 翼を広げた鳥形埴輪の出土した場所はわかっていますか。

仲原 : 東造出では方形区画内の墳丘寄りの場所で出土しています。円筒部の高さが高いため円筒埴輪より上に出ているような格好になります。西造出では造出の北西部から出土しています。かなり動いている可能性があります。出土状況からみると、埴輪が集中している部分から少し離れた、須恵器の大甕が出土する部分に近いところにあります。東西とも場所は違いますが、方形区画内でも少し外寄りの場所で出土するという共通点があります。この埴輪に限らず、東西の造出とも動物埴輪は、方形区画内の円筒埴輪列の近い部分から出土する傾向にあります。